

TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

『フィネガンズ・ウェイク』第3部第1章の概要

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大島, 由紀夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/411

『フィネガンズ・ウェイク』第3部第1章の概要

大島 由紀夫*

(Accepted October 28, 2010)

The Epitome of James Joyce's *Finnegans Wake* III, 1

Yukio OSHIMA*

Abstract: I translated into Japanese James Joyce's *Finnegans Wake* III, 1 (p.403 l.1 ~ p.428 l.27). In some parts I translated it word for word, but in other parts I just give the gist of the sentences or the paragraphs. So in naming the title I used the word 'epitome', not 'translation'. The epitome mainly treats the dialogue between Shaun and the people.

Key words: *Finnegans Wake* Part 3,1 epitome

聴け！

【教会の鐘の音が】12回だ、2回さ、11回だね、4回だよ、(あり得ないけれど)6時か。

耳をすませ！

4回だ、5回さ、5回だね、3回だよ、(確かに)0時だ。そして眠りの鼓動が静寂の中にこっそり忍び込んだ。

白い霧虹が広がる。要塞となったアーチ。カプセルの形。鼻のように全く見えない男の鼻。それは自然に色付き、しわが寄り、紅潮する。彼のナイトキャップはハリエニシダ【のような黄色い円錐体】だ。彼はブナの木々に隠れてもじもじするほら吹き野郎。彼の表情は私が覚えていられないくらいに気まぐれに変わりやすい。次の展示物である彼女は、彼の【復活の基である】アナスタシア。彼女は低い声でデルフィの神殿での祈りの文句【のような寝言】を口している。ここの【夜明けの光で】緑色になっている部屋部屋を見よ。あそこで凝視している紺色の歯の男の名前は何かというのだ。ユグルタ【アフリカ北部の紀元前の古王国ヌミディアの王】だ！ユグルタだ！彼の口は野蛮なインド人の口だ。見ろ、彼の皮膚は角のように硬い。そして目が今やお前に向けられている。荒々しい野生の世界に住む最も美しい女だ。私の口蓋の天井部分に、みだらな唇で、うなぎのような、鳩も吸い取る舌を使ってキスしてくれるだろう。【彼女と二人のときは】すぐに去れ！近寄るな！戻れ！消えろ！

どことも分からない国のどこかで心地よく眠りに陥っている間に(そしてそれはあなたと彼らが我々と一体化していたときだったが)、瀟洒な、古い、しみだらけの教会の鐘楼から微かに聞こえてきた真夜中の鐘の音に混じって、雌ギツネの笑い声が0時に響いたように私には思われた。そしてこのとき夜の紫外線のために、大英帝国とアイルラン

ドのあらゆる生気に満ちたものは、目を凝らしていても人間の目には見えなかったが、ただほどなくして、おそらくある閃光が沖積の川の表面にきらめいたようで、[404]そしてまた草地に置かれている何枚かの洗濯物の上着が、ごく近くで大きな期待をこめて何かを待ち構えているように見えた。ゆっくりと夢の中に入りつつあったとき、無為にまどろんでいたとき、何と、轟音が轟きわたり、地上における這う者、すべる者、飛ぶ者、また森の中で踊る者、話す者や、土の中の唸る者が皆大声で怒鳴り、その声がこだましたように思われたのだ。ションン！ションン！手紙を郵便受けに入れてくれ！と大きな声で。そして、そう、高いところにいればいるほど一層甲高い声で、また低いところにいればいるほど一層低い声で、彼らはそう言っていた。そして驚いたことに、何かはその音から現われたように見えた。あらゆる暗闇を取り払うであろう者が現われたらしかかった。ときとしてそれは重々しい足音のようであり、ときとしてそれはおそらく。そのときどうしたことか、光が差したのだ。それは閃光のようでもあったし、雨のようにぼやけたものでもあった。アア、光のないところでは、まさにそれは真実味を帯びていた。どうだろう、それはベルトについている彼のランプだったのだ。確かに我々が影と夢想していたこの者は、等身大の人間であり、この若者であった。祝福された瞬間であった。まさに夢のような出来事であった、この者は留まろうとしていた！本当に、私の目の前でこのように幻影を支配したこの者は。客席に向かって左手にいて、手近に小道具を置き、まさに身なり正しく伯爵のようないでたちで、抜きん出て端正な藍色の高級な防水加工の、踏まれて足跡のついたフリーズコートを着用し、アイルランドのフェリーの船員がつけるようなカラーをつけ、イルカ模様のレースを肩からたなびかせ、か

* Department of Maritime Systems Engineering, Faculty of Marine Technology, Tokyo University of Marine Science and Technology
2-1-6 Etchujima, Koto-ku, Tokyo 135-8533, Japan (東京海洋大学海洋工学部海事システム工学科)

かどが鉄製で底が釘でとめられ、住民の大半がスコットランド人の社会とその気候に合うように頑丈に打ちつけられてある、継ぎ目革が縫いつけられた分厚い短靴をはき、神が用意した豊富なウールでできたジャケットを着て——そのジャケットにはサラサラと柔らかな音の鳴る折り襟と、ボタン用の穴よりも大きな、大いに役に立つ、法皇の着衣のように赤い22カラットの大きな封蝋でできたボタンがついている——、それに傷みにくいバーラップ【黄麻繊維の目の粗い布】のベストを身につけ、非常に大きい長さ7.4インチの流行のネクタイを締め、派手なボヘミア風の小間物を持ち、淡紅色のオーバーシャツ——このシャツは星模様がちりばめられた薄地のゼファーで、前部は明らかにサプリス風で波状になっており、その上に緑、白、オレンジ色でRoyalのR、MailのM、RMD【DはDublin】と刺繡され、彼の生涯を通しての銘文の文字となっていた——をジャケットの内側にこれ見よがしに着て、指には硬貨をはさみ、今までに最も首尾よく運ばれた蕪のような、羊の脚のような、くるぶしの上が破れ、靴のかかとを抱き込む形になっているズボンをはき（何と完璧な折り目だろう、いかに申し分のないカーギー織りなのだろう！）、万事最高の状態で、他ならぬ（アア、神とマリアと聖パトリックと聖ブリジッドの恵みが彼の身全体に行き渡りますように！）誰であろう（彼の配る大いに歓迎される、[405] 大至急と書き直された、内容の煮詰まった手紙が増えますように、どうかどうか多数になりますように！）ショーンその人が現われた。

何と原始的な光景だろうか！

ターペイ博士並びにグレゴリー、ライアンズ両氏ももっている、そしておそらくマクドガル導師ももっているであろう共通の優れた頭脳が私にも備わっていたら嬉しいのだが。しかし哀れなロバである私は、単に彼ら四人の浮浪者たち所有のロバとしての存在に過ぎない。しかしショーン（聖なる使者である天使たちが、まどろこしい行き当たりばったりのやり方で、常時彼に注意を促してくれますように！）、ショーンその人（紺青色に滑り行くすべてのよき星運が、彼の変わりうる人生の予定表を形作り続けますように！）が私の前に立っているように思われた。そして私は粗野な言葉ながらも、この晩の光景について、160余の網膜に映ったが故に真実である、と誓って言おう。つまりこの若者は優れた人物、シャレ男通りを歩くような好男子、これまで存在した中でも一流の部類に入る人物に見えたということだ。彼は元気だったかって？疑いようもなく堂々とした姿で、すこぶるはつらつとしていて、普段の健康状態よりはるかに良好に見えたと言っても過言ではない。その晴れやかな眉は他の者と見紛うことはない。決してディナーを抜くことはなく、この何か月もの間 r のつく月でなくとも牡蛎の食事をとり、そのあと他の食べ物で食事を仕上げる時にはタラのワインの澱に別れを告げながらそうする、こんな人物があなた方にとって一人いたのだ。あの

面白い形の眼鏡の持ち主！名簿の中心人物！そして雌鶏かごを狙う人物。彼は巨体で、とびきりの肥満であった。というのも、この時まで24時間ずっと酒と食事で、気心の知れた連中のいる居酒屋で、楽しい時を過ごしてきたからであった。もしも知りたいのならその居酒屋の名前を言おう。「運命の紡ぎ車、セント・ローレンス・オテュール亭」である。この店では、こん棒は玄関に置いて入り、セルフサービスで、クルミケチャップは使い放題、ピクルスとチャツネは無料であった（この居酒屋はかつてのプリストルとバルロサリーの女王が二度賞賛した、というのも彼女の家の正面玄関の入り口が、デイスン通りに面していたからであった）。この酒場で、愛らしい目をした人たちの見守る中、彼はそのならず者としての心を荒れ放題にしなが、仮庵の祭りに備え、何マイルもの長さをもつ鋤を使って食べるような大盛りの食事でその体力を強化してきたのだ。その食事は、3回の主な食事プラス1回の軽食からなり、彼の朝食の最初はブラッドオレンジで、次は産みだしたの卵を使った半ポイントのベーコンエッグと、砂糖の入っていないラズベリーブディングと、みなぎる暗黒の夜から残っている石化した冷たい貧弱なステーキであり、その後、食べ物への偏見なしに、[406] スナック感覚で、深鍋に入ったディナーが出てきた。それは領収書をつけてポータリントン肉屋のブロング氏が売る非常にまれな最高の丸いステーキ半ポンドと、ブレンドのヨークシャブディングと、一對のチョップ（お代わり自由！）付きの、丘の上に住む雄鶏の女性所有者が銀の焼き網からよこしたベーコンと、グーラッシュ【ハンガリー風ビーフシチュー】と、それに浸して食べるブンパーニッケル【黒パンの一種】、タマネギの球根（真珠、真珠、熱した真珠だ）、そしてまた第2のコースも続き、それから最後に11時が過ぎるとアップルレッド亭やキティー・ブレイトン亭での軽食となった。それは鞍下肉のステーキと、喉を潤すためだけの古くからあるフェニックス黒ビールをついたサンドウィッチ、スウィートポテト、アイリッシュシチュー、口笛を吹いて気楽な気分でごくごく飲み干すためのまがいタートルスープ、そして彼がそれで舌鼓をうつと、さらにそのうえ、既に切っているポーランド社製造のパン、彼が残念に思ったものだが、寝酒付きの夜食、つまり第2のコースと同じようなコースで、ナス、ソラマメのついた（たっぷり量のある）ベーコン、イチジク、ステーキ、そして熱が通って暖かい胡椒味の貴重な肉付きの骨、それらが終わった後は、今まで以上に多くのキャベツと、無造作に盛られたおそらく慎ましやかな量であろう新鮮なエンドウ豆が添えてある子牛の冷たい腰肉、その後、見事なアヒルの詰め物が出され、彼はこれをつがつ食った。これで最後であった。追伸、ただし、安らかな気分になる少量の温かなオランダの生のジンがその後出された。本当にありがたい。パンと海藻とティパラリー州産のジャムも出され、素晴らしいことにすべて無料、そして。そして極上のワイン。というのも彼の心は彼の体躯

と同じくらい大きかったからだ、いや実際、彼の体軀よりも大きかったのだ。パンが粉状になり、ナイチンゲールが鳴いている間に【そうした食事が出された】。すべての篤志家諸君、ジョッキに乾杯！マヴロダフィネというギリシャの酒、税関の誇りとなっている、食事のときに受けがいい褐色の飲み物、礼儀正しく、乾杯、乾杯！いつも紅茶のことを、アン・リンチ【ダブリンの紅茶】のことを。彼は心から夢見ている！我が賛美を受け給え。紅茶は最高のもの！長く永遠に！このようにして彼は新たな彼になった、そしてこのようにしてますます大きな身体になっていくであろう。そして舌もどンドン肥えていく。空腹夫人の指図で。しかしながら！いいですかね、食事に取りかかることについては、それが単にハムとオレンジだったとしても、かじられてもボルトのように固い丸い食べ物を食べるとしても、彼の食欲さげしからぬ罪だということを、私は当座の間受け入れるつもりはない。しかし野獣は野獣なのだ。概して食欲が旺盛なときには、セックスの前でも、かなり安い値段ですんだセックスのあとでも、真夏の8月であれ春もたけなわの5月であれ、[407] 口笛を吹いて浮かれ騒ぐ客たちが戯れているなか、彼は大食と美食の間でちゃんと物を食していた。彼が食事に矢のように向かうときにはいつでも、上手に飾りつけられたタルトに舌鼓をうつとともに、ギネスを一本飲みたくなるときにはいつでも、彼は高価なスモールガスボールド【立食式スカンディナヴィア料理、オードブル、肉、魚、チーズ、サラダが出る】を食べていたのだ。尤も、最終的に彼の食事前の体重は、食事後のだいたい体重と比べて、ハエの卵くらいの差しかなかった。そして女子学生のような生き生きとした色つやが、イースターの翌日の月曜【イースターの翌日の月曜にイースター蜂起が起った】の新聞に載るような彼の顔に美しく浮かんでおり、そうした彼は颯爽とした御者であった。彼は質素な身なりで、言うならば、地面を強く踏みつけながら堂々と前に出てきた。こう言うためにである。

そろそろ出番だ！

そして見よ（静かに、サア静かに！）、緑色が濃さを増した無音の暗闇の死の世界の中で、その緑が赤へと矢となって変わるのを見たとき、その赤の流れが目に入ったとき【ショーンの腰のランプの明かりを見たとき】、ショーンの声を、アイルランド人の声を、遠くからの声を私は聞いた（確かなことだが、「御身はペテロなり」を歌う人々の合唱の中で、パレストリーナを歌ういかなる男性の声も、彼の声以上に全英国教会的な声ではなかった。マイケル・ケリー【テノール歌手】の声も、マリオ【テノール歌手】の声もそうではなかった。そして確かなことだが、数多くいるイタリア人のうち、彼以上に勇気あるいかなる者が、小便用便器に落ちた新鮮な卵をそのまますったことがあったろうか）。その声は、インチゲラからオゾンに満ちた海をわたってアイルランドにきたそよ風であり、香り立つ夜の生態に対してこのそよ風が溜息をついた様をかなたから（ムア・

パーク【イギリスのサリー州にあるサー・ウィリアム・テンプルの領地】から）伝えるものである。その声はクリフデンの高くそびえる無線局のマスト【アンテナ】が、ノーバ・スコティアの高くそびえる姉妹の鉄棒【アンテナ】に、ざわざわと無線で秘密（藤紫色のポートワインのこと！藤紫色のポートワインのこと！）を明かすのと同じくらい秘かなのだ。真空管、真空管の無線通信と同じくらい！

彼の手のひらはあがり、彼の手の甲はへこみ、合図としての彼の手は指し示し、心としての彼の手は仲間を生み、斧としての彼の手は振り上がり、葉としての彼の手は落ちた。人の心を癒す形のよい役に立つ手。全体的にそれは何なのか。その手は手真似をした。

そしてその手は言った。

—やあ、アア、愛するランプよ！ランプがゆっくりと静かに消えていくということは休息せよということか。一般演説のリハーサルとして、ショーンはあくびをした（このあくびの原因は、堅いパンのついたキャリアー【イギリスの鳩の一種】を使った鳩肉のパイを前日に、またハヤシ肉料理を前々日に、それに加えて頭に残っているシャンペンを火曜日に、過去の記憶をたどりながら、ミッキー・ルーニーのバンドが奏する未来の音楽の装飾音となる現在のしゃっくりを引き起こしながら、食べ飲んだからである）。そして高みから語りかけ、不満げな声で、幕が上がったという事実について、劇場の只券や無賃入場、劇場一杯の無料入場者について、つぎはぎのコートを着ている自分が、今日顔に汗し嘆きながら、[408] 明日のパンを稼ぐことについて訴えた。この時彼はこっそりと咀嚼して口の中をつばで濡らし、臼歯を二本の人差し指でほじってきれいにすると、息切れしたうさぎのように体力を使い果たし、完全な疲労困憊の状態ですぐに横になったのであった。彼にできるのはこれだけであった（身体のあちこちを合わせて何トンにもなる体重が、彼にとっては堪え難い100人分の重さになるということに、彼は自己嫌悪を感じていた）。彼が身を沈めたのは、誰も足を踏み入れたことのない草むらがひぎまで覆う、彼が生まれた彼の愛する荒れ地の上であった。というのも、今までアイルランドの地に足を踏み入れたいかなる者が、泥炭から外れたところで寝ることができるというのか。そう、こんな状態の自分を見ると、僕は文字どおりうちひしがれてしまう！本当になんとも自分は価値のない人間だろう、単なる安穩とした郵便配達人であり、哀れな第一級のろまな敗残兵に過ぎなく、キャンディーア【クレタ島北部の古都】の小太り王子であり、もっとずっと正確に言うならば、脚力も肩書きも不十分で、僕や君たちや彼ら、つまりみんなが休息の規範に従って手足を伸ばしている時間に、英国国益事業の仕事に従事し、あまりに多い手紙を、類を見ないくらい立派に配るほど卓越もしていなければ傑出もしていない！僕は苦痛を感じるよ、君たちも苦痛を感じるがね。僕は抜け目のない人間になっていたかもしれない。その抜け目なさ

はあまりに早くに奴の歓楽を刺激し、あまりに遅く奴の誕生にふさわしいものとなったんだがね！配達人はあだ名のついた僕の兄になるべきだったのだ。というのも奴は長男だし、僕は奴のいつも献身的な味方だからだ。僕は僕たちがお互いを心から愛した昔の頃を、当時のまままぶたに浮かべることができる。愚か者のサイモンのためにパイ作りの男がへとへとに疲れきった何年間。我々は双子の子供部屋を共有し、ただ一人の女の子にウィンクした。今日シエムがむせび泣きながら言うことを、僕は明日受け入れるであろう。というのも、そうならばいいと思っていることだが、それがとんまなシエムの祝祭日となるだろうからだ。向き合え。向き合え、昔に、ずっと、ずっと、ずっと以前の昔に。僕は君たちの砂時計だ。見てみる！僕をまねて、彼はかなりやせたようだ。僕はあの兄が大好きだ。魚の手をしたマクソーリーの双子【「マクソーリーの双子」は歌の名前】なのだ！異邦人だ！埋葬者だ！万歳！アイザック・イーガリーのロバさ！僕たちはバオデンイーヴァーでのギネス祭にシム兄弟として名を馳せたミュージックホールのペアなのだよ。この舞台にのぼった彼奴を僕は笑ってはいけない。でも彼奴はあのようなゲームでの負け犬なのだ！彼奴には僕のレコードを残してやった。金管楽器にリード楽器も、しっかり持って準備しろよ。君たちと隣同士だったハンディーはどうしている、今彼女はどんな様子なのかね。初め奴の人生の目的は、あの長女が何を考えているのか感じとろうとすることだった。最後には年老いたパトリックおばさんが何をするのか是非知りたがっていた。【終始シエムは女の言動について興味をもっていた。】4回目の乾杯にこのパワーのウィスキーを飲みたまえ。再び、乾杯、乾杯、乾杯だ！そして12ヶ月間それが続いた。僕は売春婦崇拜者ではないが、ハンディーのことは尊敬している！僕自身のことも考慮に入れてね！ハンディーは学習してきた！彼女は安らぎを売る。君は偉大だ！[409] ウェリントン公爵だね。でもね、双子でも彼奴は恐ろしくやせて見える！バントリー・ベイで奴シエムが歌っているのを耳にした。奴を墓の中に横たわらせてしまえ。いいか、いいか！僕じゃないよ！そうだ！そうだ！というのは、僕は郵便事業のただ中にいるからだ。話し手としての僕の峻厳な真価に基づいて言えば、僕は郵便事業にとって価値あることをした覚えは全くない。考えたこともない。絶対がない。そんな時間は全くなかった。聖アントニウスの導きなのだよ！

—しかし、と我々は思い出した。今まで【答えてくれるよう】ひとえにお願いしてきたことですが、親愛なるショーンさん、誰だったのですか、ネエ、先ず初めに、誰があなたに共感して【郵便配達人になる】許可を与えたのですか。

—ではさようなら、ショーンは教会旋法を用いた歌声のような透き通ったまさに優雅な響きの声で、彼の脳がカリフラワーのように豊かな大きさになる時を予感させる豊富な頭髮の毛を、よきカトリック教徒として引っ張りながら答えた。ヤアヤア！ごきげんよう、ムーア人君たち。僕の

ことかい？ご機嫌麗しいと君たちに挨拶しろと言うのかい？あの冷淡な諸手紙はどうなっているのかだつて！主があればに芥子を塗りたくってくれればいいのに！疲れる、本当に疲れる仕事だ。僕のひざには悪鬼の角が突き刺しているし、脊柱はひん曲がっている。とにかく重たいんだ！最悪の難儀で、毎日しなければならぬ。ベッドはギリシャの混乱した思想家の頭のように堅く、食卓はローマの祭壇のように何も無い。いまましいことに料理からは遠ざかっており、心温まる粥からも遠ざかっている。ほんの二週間前に、営倉から出てきた二人の男にすっからかんの状態で出会ったのさ。奴らとは賭けトランプをやった。マックブラック兄弟という名前だった—マックブレイク兄弟という名前だったと思う—ヘルファイアクラブの奴らだった—奴らは僕にいい思いをさせてくれた。【郵便配達の仕事が】五時間制の低賃金の工場の生活でもないし、その日障害を負っても、賃金が無料ではないことを信じさせてくれた。このことをただの聖なる少女殺しの預言から知ったことに最高の満足を感じている。日曜、月曜、火曜、水曜、木曜、金曜のあとに土曜がやってくる。この問題は実践によって解決するんだ！さようなら。あばよ。

—では、と我々は明らかにした、巡回する救済者ハンディー・アンディーであるあなたは、ひょっとして命令によって配達人になったのでしょうか。

—申し訳ない、ショーンは唇を湿らして繰り返した。郵便配達の仕事はひと働きしたいと思うような仕事ではなく、もともとHCEの、福音書と調和したエウセビオスの訓戒もつ大祭司的性質と司教的性質によって、生まれる前から僕に運命づけられていたのだ。[410] ある力が僕に対して働き、血統記録書という形で高みから僕にのしかかった。それゆえそれが遺伝的になっていくがゆえに、もちろんのことながら、『失われし時を求めて』のスワンでもない限り、僕には期待できるような見方は何も無い。親父の時計とは調和せずに【時を選ばずに】、その力は僕の下半身を打つ。痛風の激しい痛みのように感じられる。本当のことだ、と郵便管理者は言った。時間に追い立てられないうちに僕自身のことを言うが、新しいハイカーが通る街道を、名もなき魂のように配達し回るのはうんざりしている。辺り一面雪やら氷やあられだらけで、ついにはこの荒涼とした森の中がさび色の10月になる。ある有名な火山のクレーターの中に飛び込んだり、ダブリンの川に身を投じたり、遠く離れた「真正カトリック教会」に入ったりすることを考え、文字通り途方に暮れてしまう。あるいはランベ島の頂に行って、この自分を人との多方面な接触から遠ざけたり、モリセイ店のコルト銃が役に立たないのなら、ワインカラーの海に身を沈めたり、あるいはびったり合うので首吊り用のガーターは49センチにしようとか考えてもだ。実際それは、豚の餌にもならないような仕事だ。この地上のどこに、広がりつつあるこの不可思議な宇宙の真ん中のどこに向かえばよいのか、というのも、もちろんのことなが

ら、何をやるにも絶望的になるこの仕事を手にしてしまったのだから。

—絶望的になっていっちゃると私たちも思っています、正直なショーンさん、と我々はショーンに同意した。でも皆の手紙を配達するのは、矢張り結局は親愛なるあなたということになるらしい、と戯れ歌の種にもなった率直な連中から聞いているのです。この郵便物にかかわることを私たちに語って下さい。

—それについてはね、ショーンは楊枝も巧みに使い、堅パンを腹の中に入れてながらすらすらと答えた。僕は切手用の糊もっている。聖バーバラの祝福により、あらゆることに関して言うことはそれだけだよ、親愛なる諸君。

—愛するショーンさん、ネエ、我々はこのような愛すべき青年に申し入れた。概してどこでなら働くことができるのか教えてもらってもかまわないですか。いやあなたは働けるでしょうよ！そつと仰ってくださいませんか。そうしたら働けるようにしますよ。

—ここだね！ショーンは牛の足部のような片方のズボンの裾の折り返し部分をいじりながら答えた。遊牧民には安息日など一日もないのだよ。僕はたいていどこでも歩くことができた。本業にとってあまりに簡単なことだ。朝3回のミサの間にまた夕方2回の礼拝の間に、一週間に付き60余アイルランドマイル歩くことができたのさ。僕はいつも誰であれそうした歩行者に、僕が答えるべき者に次のことを語っている。つまり、現在（このことは『エジプトの死者の書』のテーベ校訂版のように、真実中の真実なのだが）[411] しっかりとした足もっている間は、僕の生涯の職にかかわる特権授与の通知により、僕の一日の時間のうちの残余の時間においては、この足は、あらゆる類の無謀な歩行という不必要な奴隷のような仕事から、天の命でお役目御免になると前もって定められているということさ。というのもそうでもなければ、【働くのを切り上げて】シャワーを浴びたということで、仲間割れを起こしたときに僕はつるし上げを食うだろう。高貴な最高の助言だろう。足が弱くなると働けず、歩くことができなくなり、ストップということになる。それで終わりなのだ。この島に行って1時間ばかりそこで寝ている、そのあと別の島に行って2時間ばかりそこで寝ている、そのあと夜の迷宮に入り、そのあと可愛い子のところへ戻れ。囲っている女はかばいだてするな、頼っている友人は手放すな。敵が酔っぱらうまで対抗するな、他の男の妻にはのめり込むな。【これらが郵便配達人としての助言だ。】神よ、アーメン！神の渴望は実現されるだろう。平和島【アイルランドのこと】のように大陸でも。しかし信じてもらいたいが、思うに、純真な僕は極めて善良な人間で、だから根本的に僕は右の頬という規律を守っていることで賞賛されている！そして僕は、神の前で、真心こめて、今肉に拘束された手のひらを使徒書簡書の上におき、母さんや父さんや普通の尼さんや普通の坊さんのために、分別をもって最大の努力を払って、膝ま

ずきながらロザリオの祈りを捧げることを宣言できる。ハンモックの上で最高の気分が味わえる我が家はどこにあるのかとか、日々のパンのためにこの日を我々に与え給え、などとか、幸福なマリアよ、栄光あるパトリックよ、などなど【の祈りの文句を唱える】。実際僕は常に信じている。クレード！これが僕の言葉さ！

—でもそれは生粋のアイルランド人の虚言ですよ。しかしちょっとしてみると、親愛なる独断的なショーンさん、私たちが指摘しているように、あなたはクタクタになりながら緑色【緑色はアイルランドの象徴】でずっと街を塗ってきましたよね。

—ただの厄介な仕事さ。どうやって耳にしたんだい？このときランプの明かりに尻込みしながら、油まみれになって袖でランプを拭きつつ（そうするのは全く自然なことのように思われた）ショーンは答えた。まあ仕方ないことだがね！暗闇に数条の光線がある、そのまとまりが愛なのだ。でも僕は確かに塗ったと白状するよ。君たちとは違った意味合いでね。トルバドールである僕がやったことだ。まさにそうしたのだ。一日かかってそうしたのだ。サクソン人の支配などくそくらえ！吸血鬼を踏みつけたり、石炭を燃え上がらせたりすると【吸血鬼も石炭もイギリスの象徴】、僕の高級品の制服がよごれて無駄になるのではないかと心配なんだがね。ほら！石炭を燃え上がらせるのさ。いいかい！敵を燃え上がらせるのだよ。僕もその一人であるアイルランドの普通の先住民にふさわしくね。僕はまさにこの頑固者の先住民として難攻不落だ。僕が間違っていたという異なる印象をほのめかす奴もおそらくいるであろう。僕が間違っているということは決してない。君たちが犯した中でそれが一番恐ろしい誤りだ、言い訳をしなしてくれ！僕がどんなふうにもものを見ているか、見ていれば分かることだが、君たちにとってポークであるものが僕にとってはミートなのだよ。[412] 預言に基づいた僕の考え方によると、これはすばらしいことだ。皆にとっての新世界だ！そして自分が住民の仲間であることに気づいている、その新世界の中の台本作者によってのみ、住民はエックス線を当てられながら紳士に仕立てられた。僕の外向きのランプも一緒だった。にかわのようにくっつきながら。もう終わりにしよう。僕の心は日の光だ。親指トム君、親指君！

—あなたの美しい歌はなんと豊かな旋律に満ちていることでしょう、アア、歌姫ですよ、また一杯飲んだあとはなんと絶妙なのでしょう。新月のあなたの厳かな祝祭日の指定された時間に、トランペットを吹いて下さい。しかし、金髪の親指さん、あなたはポルトベッコ【ダブリンの一地区】からキャトル・マーケット【ダブリンの一地区】まで、私たちの広いところでも狭いところでも、そうなる【新しいアイルランドが形作られる】と仰るつもりですか？実際私たちは、未来は消失するのだろう、緑も美德も消滅するのだろう、と思っていたのですが。

—そういう言葉は言うならば面食らってしまうくらいの罵詈雑言だね、と品々の中から赤い胡椒を取って振りかけながら、当然のことながら腹を立てつつ、金髪の少年ショーンは叫んだ。今後はこうしたどぎついでこすりは、他の奴らにだけ向けてくれよ。この灼熱の惑星の地表で、僕が君たちの言う美德以外の何を施そうというのかね。ともかく目下のところ、そんなことは僕に決められるようなことじゃない。どうかそんな話はやめにしようじゃないか、湯沸かし器君。この話はフランスの詩歌ではない。僕の言うことは本当のことなんだぜ。いいかい、よく聞いてくれよ（そしてどうか口笛を吹いたり、派手にわめいたり、言い返したりすることなどないようお願いする）、以前の僕の年長の友人、女性郵便局長であり、特に「スコットランドの貧者のための 1000 ガロンの牛乳の会」の陽気な収入役であるミス・エンダーズ（僕は何度も彼女のことを考えていた）が深く嘆いていたことだが、最大規模の郵便局で、22000 マイナス 1 人という職員のうち、区分け人が 22000 人と恵まれていたにもかかわらず、この郵便局の小包担当部では個人的な便箋や保険証書が、主に年金への強欲に駆られたあの腹立たしい悪漢たちによって食べ物にされ、その数があまりに多いというのだ。何ということだ、恐ろしいばかりの欲望だ！話を続けると、次のことも僕がいつか（それがいつであるか言うべき心の用意はない）是非行いたいと宣言することの一つだ、アア、ウェールズのフェュージリア連隊が都市を救って僕の出版社であるノーラン&ブラウン社、ニッキル・ホプスタウト社、クライストクラス社を存続させてくれたことに関連して、連隊のマスコットおよびスケープゴートになっている山羊と羊の皮でできたボクシング用グラブの形をした緑色の貯金通帳を、[413] 運命の力のおかげで僕の給料が現金で前払いしてもらえらる限り、僕の体の下部に足がある限り、僕に腹部がある限り、僕のペンが引っかかるのと同じ頻度で是非是非作りたいということだ。

非常に高潔な、民族の記憶となるべき、最も気品があり、時に筆者にとって有用であった、中庭を掃いて下さった夫人に対して。お悔やみの言葉を申し上げよう。まさについてこの間亡くなられたミセス・サンダース（主も彼女のとなりを請け合う！）—彼女にとって僕は不正直な悪童だった—は、姉妹であるミセス・シュンダース夫人とともに中学の寮の校医で、また彼女たちはお互いそっくりだった。彼女は僕が手紙を受け取った中で最も素晴らしい人柄の、教養をもち、公平を重んじる女性で、極めて体格がよく、乳幼児に慣れ、多くのことを語る方であった。最近の彼女の日々は死が間近に迫っているような日々であった。というのも、一日のうちずっと酒ビンを揺らしていたり、薬を飲んでいたので。この故夫人は 90 歳にはまだまだ遠く、詩をたしなみ、聖アンダーソンのように優しい我が天空の一角に月が昇るとき、ガーリックのお菓子和新鮮なお茶を僕にごちそうしてくれた。故メヴロー・フォン・アンダーソ

ン夫人は、朝食パーティーのための朝食に、羊肉のプロスを僕に出してくれた人物だ。あなた方の父親と僕の手紙に栄誉を与えたまえ。諸君、これは、今は亡き彼女ら女性たちとの付き合いについて、この通りで書いた僕の遺書だ。大気に肌を出されていた信心深いグランティー夫人【因習的な上品ぶった人のこと】が実際におられるなか、あるいはいかなる方がその椅子に座っておられるのであれ、この方たちからその丁寧で柔らかなキスを受け、彼女たちの知己となる名誉を僕は、いや、おそらく腰掛けにうずくまっていた他のいかなる人も得たのだ。この二人の女性に対する僕の心の悲しみはいかばかりか。彼女たちは 20000 ポンドの価値があり、彼女たちが心から愛していたロジャーズの手を借りて、ミカエル祭で次の結婚についての法王への願い事を二人ともに語っていた。僕の親愛なる夫人方、年をお召しの夫人方。心の渇きを二人とも落とせませうように！
未筆。

—語りのリズムとともに、あなたの話はとても魅力的です。どのようにして私たちがこの白い紙を書き埋めるかは、神のみぞ知るです。二人の美女ですか！人よりも心の大きな女性ですか！変わった話ですが、先を続けて下さい！本当のことを話してください、完全に本当のことを！率直なショーンさん、別の話をするのなら、あなたのしなやかな体の上にある制服には、どのようないきさつがあるのでしょうか、と我々はあくまで問い続けた。

—こりゃ、どうだ！いきさつなど全くないよ、とショーンは答えた。すばらしいくらいに何もなし！（彼は既にその気になっていて、今やルビー色のタマキビガイのペーストにかなり目を近づけ、じっと見ていた。）尤も制服にはロココ風のロマンティックなところが多少なりともあるはずだがね。ところでフライ君はどうなっているのかね。誓わなくてすむのならこう言えると思うのだが、制服にまつわるすべて【の金】は、つまり給料、臨時収入、[414] 冴えないはした金、いくらかの金、アア、楽しい金は、僕が自発的にうまく処理した（我が出版人であるこのミス・アンダーズには 100 ポンド渡した！僕が金を置いてきたあの晩、彼女はその後なくしてしまったあの亡霊のようなぼろぼろの服を着ていた）。あらゆる種類の浪費家である我が隣人たちや、聖職者が生んだ私生児たちや、追い出しを食らった借家人たちの中でも、バスの少年聖歌隊員という肩書きをもった製材業者のヴァン・ホーテン・トレッドキャッスル氏の名義を使ってそうした。言うておくが（それに制服を着なければ、僕は誰でもないし、君たちにも話をするのではないだろう）僕は決して浪費しなかった。また浪費しようなどという考えさえもったこともない。これが僕の流儀なのだ。ともかくそれはあつという間になくなった。そしてこれによって僕は新たな見解に達している。というのも、おそらく今後お分かりになるであろうが、僕は商品登録されてあるギネス氏の屋外の酒樽のうちの一つに、できるだけ自分の地を出しながら大いにお世話になるからだ。すぐ

に飲め、酒の香りを吸い込んで、ぐっと飲み干せ。サア！

—そうしましょう！我々は応じた。歌です！ショーンさん、歌ですよ！雰囲気を出して下さい！歌いまくって下さい！

[414]—申し訳ないが、とショーンは言い始めた。僕は歌うよりはむしろグリムやイソップの寓話、寓話の中の不気味な女々しくもある冗談の一つを君たちに述べてみたい。親愛なる諸君、蟻とキリギリスについての次のような場合をここで考えてみてくれ給え（ゴホゴホゴホゴホゴホゴホゴホゴホゴホゴホゴホゴホゴホゴホゴホゴホゴホ【ショーンは咳をする】）。

キリギリスはいつもジグを踊って身体を揺り動かし、その楽しさのため幸せであった（彼は互いにパートナーとなっている両後足で自らを支えていた）。また踊っていないときは、いつも蚤やシラミやミツバチや小さなスズメバチに品なく言い寄って、サナギごっこ、跳びはねごっこ、触覚ごっこ、お尻突きごっこをし、また、彼女たちの快活な動きに合わせて彼女たちの口器を彼の口や脚にもっていき、たとえ純潔なものではあっても、虫取りポットに注意しながら、月桂樹の茂みで近親的なセックスを始めた。即ち、彼はもちろんのことがながら下心をもって、身体の前部の触覚、屈筋、収縮筋、下制筋、伸筋を使って、僕を悩ませて、僕と結婚して、僕を埋めちゃって、僕を縛ってと、女が羞恥心で暗褐色になるまで繰り返した。そしてまた、無遠慮にも、あつてないようなものと言われた彼の小屋と同じくらいに夏向きの、探し求めている蚤の家に、地上で買い物をするのに最もふさわしい時刻に女を囲っていた。また、常に最高の父である老ゼウスを吊る奇妙な愉快な葬式に見立てたリールの踊りを、真っ白でふわふわとした鬘じみた花冠を使って、[415] 彼の電気仕立ての虫かごの中で始めると、石果にいた彼の若虫であるダリアとボタンが、その眼を触角のある溶岩塔のような彼の頭に向け、彼に甘い言葉を投げかけた。そしてブーツを履いたブリマドンナである年長の婦人方（7泡分の石鹼、1なめ分の石灰、2噴出分の燐、3屁分の硫黄、1振り分のシュガー、1ダースの穀粒分のマグネシウム、1ナイフ分の半カップのピッチを彼女たちは身につけている。この貪欲な者たちは皆、ボルネオからブービーの貝の渦巻き模様の車に乗って街に到着した！）は、彼の頭をかいいたり、のどをくすぐったりし、卵を山と産んだ彼のアブラムシの周りでタンバリンやカスターネットを鳴らしながら、過去を恐れ、背中と背中を合わせ、幻想に酔いしれた者のように、【ロートレックが描いた】ジャンヌ・アヴリルのように、ラ、ラ、ラ、ラ、という声に合わせて、かかとをゆっくりと、つま先をゆっくりと動かしながら、死の舞踏を踊った。そしてそこには蛾や無数の蜂たちが伴っていた。蛾はつぶやいたり、人の話を聞いていなかったり、死んだように押し黙ったりして虫かごに入っており、蜂たちは『暖かい土曜日のニュース』や『慎ましかに、黙って、しばらくの間我々は沸き返った』や、し

かし『オーイ、時間だ、時間だよ、目を覚ませ！』をも騒がしく歌っていた。彼女たちがそうしているのも、科学（何が何であるか【を明らかにする】）が、すべての優れた者の中でも特に偉大な者についてさえ我々に対し完全に黙ることがあるのに対し、おそらく芸術（底抜けに楽しいことは底抜けに楽しいこと【を明らかにする】）は、腹をたたいて鳴らす、ちっぽけな、取るに足りない者についてさえ我々に向かって何度も歌うだろうからだ。幻惑されたみんなにとっての楽しい一時、神に感謝すべき丸一日！あらゆる者にとって目の覚めるような一時、どの女もいかれた気分になって。というのも、時間であるクロヌスは刻一刻とゆっくり進んでいくが、彼の子孫は未だはしやぎ回っているからだ。地上のあらゆるものは、まやかしと逃避のあらゆるものらしく、葬儀の書が彼らに別れを告げる時でも、時間を浪費しているように思われた。

何とマア、どうしようもないね！くだらないもいいところだ！人を馬鹿にしている！誠意がない！シラミも！蚤も！ペツ！何という時間の浪費だ！と蟻は言葉を吐き出した。蟻は夏に浮かれる愚か者ではなく、窓辺の鏡に映った、熱帯とは逆の冷たい虚無に覆われた自分の姿に向かって、考え深げに少しばかりしかめ面をしていた。俺は蚤のところのパーティーなどには決して行かないぞ、奴は俺たちの社交リストには載っていないからな。あの怠け者の蜂の葬式にも行かない、身体に魂がある限り、あの古いぼれの蜂の住処には決して行かない、とどうやら彼は心に決めたらしい。それにもかかわらず、容器に閉じこもって安全な状態にいると彼は両手を挙げ祈った。私に水を与えることをお止めにならないように！至福の世界を！私を疎んじないように！至福の世界を！ペイビ【古代エジプトの王】の領域が広く及ぶのと同じくらい、私の支配力も広く及ぼして下さい！ハビ【エジプトの神】の復讐の気持ちが高まると同じくらい、[416] 私の憎しみも高めて下さい！大きくして下さい、広めさせて下さい！私に力を貸して下さい！フムム。

蟻は猫背で強靱で健康な体を持ち、かなり背が高く、そばに寄ると1シリリング銅貨くらいの背の高さがあった。その精神は冗談を言うようなものではなく、非常に真面目くさった顔を、ドイツ人のようであった。しかし、アア！その姿は冗談を身につけており、神聖そのものの口ひげを生やし、驚くほどに賢明なドイツ人のようであった。さて愚かなキリギリスが、マルハナバチと結婚したり、マツモムシとともに酒を飲んだり、ガガンボをだましたり、テナトウムシを熱く追い求めたりして（俺はチャンスを利用するのだ）、愛欲と借金がごたまぜになった日々を過し、のちに無秩序な他人への不信の生活を送ると、まさに彼は重い病になり、極貧に陥った。そしてどこに行ったらユスリカに会えるのか、どこで甲虫を探しその甲皮を求めたらよいのか、どこで収容施設を見つけたらよいのか分からなかった！かさかさになったパン！尽きた食べ物！キリギリスは

すっからかんであった！世界全体が空虚であった！空虚、空虚、そして空虚！パンのかけらを買う金も一銭もなかった！我が神よ！我が神よ！花粉籠がけいれんする！何という苦境！アア、我が神よ、彼はふさぎ込み深く悔いた。忘却者の彼に嵐が吹きつける。俺は死ぬほど空腹だ！

キリギリスは壁紙を全部食べ、シャンデリアを飲み込み、階段を40段貪り食い、すべてのテーブルと長椅子を噛み、レコードをかじり、カゲロウの団子をすべて口に、シロアリの巣の中にある時計すら、これ以上はないほどにガツガツ貪り食った——体の大きな、キナンを体の成分とする者にとって、あまりにもみじめな、たいして栄養にもならないものであったが。しかしクリスマスが裸の枝の上にも訪れると、彼は「空虚中の空虚」をあとに立ち去った。彼はぐるぐる歩き回り、ぐるぐるとまわりを歩き、またぐるぐる歩き回った。そしてついに頭の中の焼けつくうずきと髪の中の寄生虫の幼虫のために、自分の頭と脚が逆になったのかと思った。俺は夥しい数の死者の中を2度巡ってきたのだろうか、そして死者にたかるウジ虫の中を3度通ったのだろうか。俺は天使とともに天国に昇ったのだろうか、あるいは法皇とともに地獄に落ちてしまったのだろうか。糞の粒となった蠅や無数のキリギリスや無数の多足類の虫の上に、六月の雪が厚くフワフワと積もっていた。歩く者を巻き上げるような吹きすさぶ旋風、アドリア海の風のような大風が山高帽に吹きつけそれをぼろぼろにし、家の屋根からスレートを吹き落とした。[417] 刺激的な、突き通すような、吸い上げるような幻のような力で、うなり声をあげ破壊を楽しんでいるのであった。恐ろしい！跳んで逃げよ！恐ろしい！跳んで逃げよ！

キリギリスは、判断力が乏しかったが、少なからず昆虫学をかじっていたので、できうる限り大きな声で鳴きながら、許しも許可も求めずにすぐにヴィーコの循環的世界観に没入し、自分の運がどこで輝くのか、自分の触覚がどこで休まるのかをめまぐるしく考え、またこのあと次に蟻と知り合いになるときは、このような音楽的アンサンブルをもって出会い、自分とは異なる世界【蟻の今の境遇】を見ることがなければ大層幸運なことだろうと思った。今や蟻閣下は玉座に座り、皆をひれ伏させ、バビロン風のスリッパを履き、特別にブレンドしたハバナ産の葉巻を吸い、想像もできないくらいすばらしい生地から作られた縮むことのない蝶模様のパジャマを着、日当りのいい部屋で暖まり、落花生とミントの菓子が彼が満足するほどに積まれている皿の前に座り（というのも、蟻はれっきとした禁欲主義者でありアリストテレス学徒であったからだ）、鳥のミツスイや海水浴場でひなたぼっこしている少年のように幸せで、蚤に太ももをかませ、シラミに左足を抱かせ、蜂に縁なし帽子の下の顔にキスをさせ、彼の小さな体全体に幅広く、気持ちのよい優しい粉を蛾に吹きつけさせていた。彼女たち昆虫は、これ以上はないというほどに馴れ馴れしくしていた。蟻など糞食らえだ、気違い野郎、鞭で打たれてしまえ、

何という光景だ！と、嫉妬で呆然とし、途方に暮れたキリギリスはくしゃみをしながら思った。

正真正銘完全な主人となった、悪意の紡ぎ手である蟻は、彼の女王であるカゲロウに対して、体の許す限り最も馬鹿にした態度を取っていた。というのも、何よりも私通を犯し、天国のニンフたちと一緒にバスにつかかって限りない幸福感を味わいたいと体中をうずかせていたからだ。彼はスズメバチや蝶を相手に大いに楽しみ、慈悲心から蚤を追いかけ、僕もまたそうしたいと思うことだが、シラミをくすぐり、また実際蜂にも組みつき、煙突のそばで冗談半分に蛾をうずかせたのであった。蟻の砦からやってきたキリギリスも、これ以上悪魔的には踊らなかつた！マントも靴も身につけず、生命力も枯渇し、実際僭越にも長期にわたる絶望を神聖視しながら、3度むなしく旅に出たあとの、頭を泥だらけにした、この世のものとも思えないキリギリスの実際の姿は、彼が魅力的なコーラスを奏でるにはあまりにひどいものであったろう。[418] 奴から寄生虫である女たちをひっぺがし、奴を孤独な嘆きの芸術家にさせておけ。俺は高給取りの権力者になる。まがい事を書き散らす見捨てられた無価値な放蕩人の落伍者め、でも金をもった公爵は金を生むメロディーを作るのだ。偉大なる神を永遠にたたえよう！その栄光のために。2度と家の敷居をまたぐことのできない者よ。神だって？蟻の船をひっくり返す神は、死者の中をうろつく主は、悪に助言を求めるのだ。そのままの姿でいろ。それも仕方がない。芸術家であるお前よ、はかない浪費家よ、俺の叡智を受け取れ。神よ！

このことは蟻を喜ばした。そして蟻は笑い、笑い続け、大きな声を出したので、キリギリスは場所を間違えて脱糞してしまうのではないかと思った。

偉大な蟻さんよ、許してやろう、と泣きながらキリギリスは言った。

彼女たちのおかげで、お前の家政は安泰だ。

蚤とシラミにポルカを教えてやれ、蜂には菓子のありかを、蛾には分厚い奴を細かく切って、必ず火を通すようにさせよ。

俺は以前パイプを吹いてばかりいたので、今その代償を払わなければならない。

そのようにモハメットには言ったよ、そして蟻塚に別れを告げよう！

高いところが大好きで飛んでいる彼女たちを一人前の女にしてやりな。

この飛んでいる者がもしカブト虫だったら、俺はこれほどふらふらになる思いはしないだろうに。

俺はお前の非難や友人のあら探しを受け入れる。

というのも、お前の節約への報賞が俺の浪費の代償だからだ。

昔のつまらないことが帳消しにされるなら、カストールは

ポリデウケースにキスすることを蔑ろにするだろうか。
ポリデウケースがカストールを目覚めさせなかったら、
カストールはいらだつだろうか。

このことを包含している言葉は、貪欲なる者も愛すべき者、
という言葉だ。

この二人は普通の人間に喜びを与える双子なのだ。

我々がグリフィン【アキランの兄弟】のいる森の跳ね橋に
いたとき以降、北にいるアキランは南【のグリフィンのも
と】へ飛んで行かなかったか。

そしてあの西方の男がどこで自分の話を終えるのか【いつ
自分が死ぬか】を探ろうとしたのは、

【彼の】傷ついた長い度重なるため息が、その聴衆の心の休
まりとなることを求めていたからではなかったか。

我々は完全にはなれないものの、役立たずではない者にな
るように前もって定められている。二人合わせて真の姿な
のだ。

人間が飛んで行ける時まで、褐色の目が青くなる時まで【即
ち、永遠に】 そうなのだ、

お前のまわりをほっついているあの虻たちを前にして、俺
の手探り状態を馬鹿にするのはやめてくれ。

空間の広がりはずまらなければならない、時間の流れは消
えなければならない、

俺の考えを偏見をもたずによく考えてみてくれ、そうすれ
ば万事うまくいく。

遠くから見るお前の表情で判断するのだが、無理をしてで
も俺を癒しに来てくれないか。

[419] 俺の着ている薄っぺらなシダにお前が偏見をもっ
ていようが、俺のきらめきは消えることはない、

すべてが正しいとされるお前の居場所のどこにおいても。
俺が持っている見えない宇宙はお前には見つからないだろ
う。

背後に多くのものをもっているそうした過去性や特性を見
出せないだろう。

お前の偉業は最後に巨大になった、お前が生み出したもの
はとてつもなく多い。

(願わくはお前の蟻としての歌のセンスを発揮してほしい、
閣下殿！)

お前の精神は世界に広まり、お前の種族はこの上なく高貴
になろう！

しかし聖マルティヌス【4世紀フランスのツールの司教。フ
ランスの守護聖人】殿、【音楽に合わせて】拍子をとるこ
とは何故できないのかね。

前者と後者と彼らの惨死の名において。すべての者よ、
アーメン。

—エーッ？何とうまい説明なのでしょう！あなたの話
の内容は何と幅が広いんでしょう、それにあなたの言葉は
何と口調がいいのでしょうか！生きていた限り歌って満足し
ながら死にたいという訳ですね。何と優れた寓話作家で

しょう、狂喜乱舞ですよ、あなたはその中にすばらしい嘆
きをこめています。それは聞く者の耳に軽やかに届き、最
も短くも小気味よいこの文句は、糖蜜のように甘美なタム
タムのリンリンという音をたてながら体の中を落ちていき
ます。コーンウォールで最も甘い言葉に満ちた弁舌です
ね！しかし私たちの知り合いであった上品な郵便配達人さ
ん、明らかに閣下に宛てた、あの書き方の奇妙な、まがい
物の装飾的な手紙を（あなたの国を変えるのではないにし
ても、あなたの名前を変えるために）、あなたはまだ樽の中
にいた間に当然読むことはできたのでしょうかね。

—何を言っているのだ！僕を敬服したまえ！とショ
ーンは耳に挟んだシナモンの小枝のペンをこれ見よがしに指
差しながら答えた。僕は法王と同じくらいに正統な気品あ
るローマ人なのだよ。そして聖水が僕の洗礼を施してくれ
ているのだ。この執筆用のペンとして使っている小枝を見
たまえ！聖ロレンスに感謝するが、僕は一杯飲んだり、ボ
トルをもったり、眼をつむったりしながら、オスカー・ワ
イルドのように書く方向を逆向きにして、まがいものの話
を書くという専売特許をもった文芸人だし、またトルコ語
やコピト語や何語であれ、それを小手先で古代ペルシャ語
に翻訳するといった文芸人でもある。しかし、困ったこと
に、手紙を配達するのは魚の目やたこにひどく悪いんだ。あ
の手紙に関する限り、盗まれた手紙についての論議から
採った君たちの言葉に賛成するよ、そして君たちの規範に
全面的に同意する。というのも、実際、いいかね、僕には
まさにあれができてのいい書き物ではないと言える資格があ
るのだ。あれはただの落書きだ。カンスー瓶の価値もない。
表現が大袈裟だ！完璧にどうしようもない屑だ。おまけに、
犯罪や名誉毀損で訴えることができる。ひどい書き損じ以
外の何ものでもなく、異邦人用の二流の代物に分類するべ
きものだ。焚書にあったチャールズ・ルーカンの書以来今
までに燃やされた書き物の中でも最低のゴミだ。[420] あ
の母親およびあの口にするのも汚らわしいあの男【HCE】
(どうか彼と同じ類いの者が生まれないように！)が、僕の
筆名を使ってニュースの種になる訳でもなく書き物にした
ゴミ箱中のあの屑について、口に出せるはっきりとした意
見をたった一言で言い表わせと言われたら、ナンセンスと
いうのが僕の言い方だ。【その手紙の内容は】彼女が御者の
身体の下に忍び込んだときのこととか。そしてまた彼がパイ
プをくわえたキャッドに会った場所のこととか。2人の女
が排尿していた様子とか。また何故3人の男が茂みの中に
いたのかとか。このあとキッチンで彼【パース・オリリー】
がフランスからフリッツまで【のあらゆる人に】手作りの
つまらない話を触れ回る。これが僕の母親でこれが僕の
父親だ。哀れなちっぽけな女と、大きな、大きな豚のペニ
ス野郎だ。彼らの命の樹（栄えますように！）は、彼らの
墓碑銘（そのままにしておけ！）のそばにある。ずっと11
人の乳飲み児がまとわりついている。何と素晴らしい、何
と素晴らしい！何と数が多いことか！何と多いことか！あ

のオランダ人【HCE】は自分の地顔のしみを見て死ぬほど笑った。そして皆が笑った。最後に奴は何をし始めたらいかが分からなくなっていた。雨の日の床で卵の殻を船に見立てて進ませている幼児の方が、よほどに常識があるね。

手紙、Hekの息子であるショーンによって配達され、シエムの母親であるALPの代筆として、ショーンの兄であるシエムによって書かれ、ショーンの父親であるHekに宛てたものになっている。イニシャルだけの宛名、ジー。不在。ハードウェア・セイント29番地。紀元1132年1月31日にダブリンのレイオヌムに物件を貸与。今はアンヴィル商会。向かい側のフィッツギベツツ通り13番地の家に届けてみた。精神異常者たちがいた。危険。9ペンスの税金、B.L.ギネス殿宛て。L.B.だった。ノース・リッチマウンド通り12番地の宛先では1132年に所在不明。読みにくい名前。何の移転先の住所も残していなかった。ジェティー・ピアスと署名がしてあった。そのような名前の持ち主はいない。ウィンドスア大通り92番地。そのような番地もない。さようなら。フィンズ・ホテル気付。1014年に追い出されていた。意気消沈。暗い見通し。間違っただけ。965通も。一目で分かる。宿無し。【住むための】タイヤでも備えつけてそれでよしとせよ。ミスター・ドンナル・オドンナリー宛て。ロイヤル・テラーズ8番地の住民。このような通りはない。よろい戸が閉まっている。首席司祭と一緒の食事【をするほどの試練】。フィリップス・パークに移転。海辺。死亡。回送をお願いします。クロントーク。ジェイコブ神父宛て。米穀商。キャッスルウーズ3番地。安息があなたに訪れますように。逮捕されていた。治安判事に。病院主義に転向。この前の3月より前、すなわち文明以前に。かつてアイルランド銀行があったところ。シティー・アームズ【・ホテル】に返送。ミルクブローク2番地。スペルが間違っている。トラウムコンドロー。現在イングランド銀行があるところ。リフィーで溺死していた。ここだ。最も尊敬すべきアダム・ファウンドリッター宛て。既に射殺されていた。ストリートピーターズ7番地。カブランク以来。群衆によって捕えられる。そう、サー・アーサー【・ギネス】宛て。[421]パターソンのマッチを買え。彼の約束の地である天国へ。この前の8月にオレンジ・ロッジによってふっ飛ばされた。差出人不明の手紙を調べよ。亡命者たちがけなししている一族。数分で戻る。修理のため閉鎖されている。シェルボーン60番地。ケートの部屋の鍵。キス。アイザック・バット宛て、哀れな男。愉快な人柄。捕らえられる。行方不明に。正当化された。転送をお願いします。ボギーパークのアブラハム・バッドリー・キング宛て、今は安らか。既に埋葬されている。ヒイラギとツタは【クリスマス・キャロルの冒頭の文句】。それはもう放っておけ。重量オーバー。料金不足。郵便局に返送。気付。自分の郵便為替を持っている。遅すぎる。売るには。売春婦と同棲。あらゆる法的権利を失った。彼のむくんだつま先が凍りついている。受取り人はXYZ株式会社。差出し人は13、12年1月31日、

ボストン(マサチューセッツ州)、料金支払済。破損している。最近になって。うっかりと。ここに執行吏がいる。そこから地獄へと落ちろ。エアウィッカー、血なまぐさい大型のピストルで。バン。終止符。バン。終止符。戻ってこい。終止符。よきアイルランドに戻って来た。終止符。

—思いやりのあるショーンさん、と我々は皆で要求した、こう申し上げるのは非常に気が進まないのですが、金の使い途のことを話題にしてからというもの、あなたは何度も不機嫌になって、あなたの知的な【cerebrated】お兄さんがためらいがちに使ったサンسكريット語の記号【シエムが自分の排泄物を使って書いた文字】の10倍もきたない俗語を、前もって一瞬たりともほめかすこともせずに使ったのではないですかね—彼のことを言わずにいて申し訳ありませんでしたが。

—有名な【celebrated】兄だっけ！ショーンは、アイルランドなまりで身を守りつつ、彼の魔法のランプを激しく擦り、最大限に自覚の光を輝かせようとしながら答えた。ためらいがちにだっけ！聞いていると君たちの文句にはイライラしてくるね。以前の手紙のことならむしろ僕は、第一に服地屋のシエム氏を悪名高いと言いたいね。実際、評価については、僕の意見を正規のアイルランド語でもって、ちゃんと伝えることを求められているからね。しかし僕はと言えば、あのときシエムの【自分の排泄物を使って】書いたものについての見解を、今から確信をもって明言するなどというつまらない思いはしたくないのだよ。いや、まったく！しかし高貴な神を前にして自分の信条をすべて言うとするならば、僕はシエムの書いたものには強い疑いを抱いている。僕が受け入れる者の名簿にあんな奴を載せる余地はない。絶対に載せられないね。無線アンテナを通してロイター通信社やハヴァス通信社からの素晴らしく感傷的な通知で1時間ごとに知ったのだが、気まぐれな愚図の奴は、いつも自分の血色の良い顔を自慢しながら、訳の分からないことを言う牧師と一緒にいてくたばりかけている！母は奴にたぶらかされている。彼奴は悪漢ゆえ自由を奪って黙らせ、喪服を着せて、[422]吊るしたほうがいい。ただ、健康保険医や野戦郵便局の検閲官に認定されるほどに頭がおかしい場合にのみ、いかさまバカラをやったということにして、足枷をつけてどこかのアイルランドの対蹠地にある精神病院に送ってしまえ。ゲッ！というのも、奴がスコットランドの蛇を見ていてサナダムシに巢食われたとか、のんきにも裏屋で【みだらなことをして】肺結核や梅毒を発生させたということは全くの事実であり、フォーコートや高等法院の前では周知のことなのだ。この裏の家で、奴が軽蔑や墮落を浄化して骨になれるのは、死ぬまで酒を飲むことによってだ。奴など腐ってしまえ！おべんちゃら屋！追従屋！お前のことを一言で言うてやろう。貴様のことを。(【こんなことを言って】申し訳ない。)同性愛主義者だと！あのとき奴のペニスを俺にのせていた！(似たものは似たものの中へ。屑は屑の中に)。犯罪者、

あの一件ではこの言葉を奴にはくれてやろう！賛美歌集に書いてあるように、性格はなかなか変えられないものだ！奴は今家事でもやっているのか、それとも軍隊にいるのか！鼻持ちならない悲観論者め。たった一冊の児童用読本と王子気取りの貧者のプライドをもって、二つの世界のどこにおいてもへまをやっていた！奴にイスラム教の本を買ってやるまで、奴が待っていてくれればいいんだけどね！奴は俺の身内でもなんでもない、豚の餌だ！身内になりたくもない！それくらいだったら断食して死んだ方がい。アハーン！

—それでは著名なるショーンさん、是非お願いしたいのですが、彼の王子がもつようなプライドを適正に扱いつつ、あなたなりの好ましいやり方で、あなたの極め付きの追従的な言葉遣いに至るような言い方で、そしてまたもう一度イソップの寓話を用いて、その手紙の内容がどのようなものであったか、明らかにして頂けないでしょうか、と我々は提唱した。

—そうね、この手紙は僕自身にかかわっているところもあるんだよね、それについて君たちが話を求めるのは結構なことだし、そうするべきだし、そうするのは歓迎するよ、と、空腹にたまりかね、一つ試してみようと【フック代わりにしていた】蜂の巣から、ハムのような、蜜のような食べられる帽子を取って、心を込めて噛みながらショーンは答えた。実に歓迎するよ。このことについては、名誉にかかわるこのことについては、君たちは皆ずっと以前に基本的な入手経路を通して、きっと情報を得ていたと思ったんだがね。確かにそれは聖ドミニクがバーデンの蜂をアイルランドにもたらした時くらいに昔の話だし、トラファルガ広場の像になっているネルソンについての話のように、今やすべての人にとってありふれた話だし、たあいもない話だ。でもマア話してみよう。話の始めはビール男【HCE】の虚勢についてだった。あの小山男と彼の借金の話さ！それから高原のユリ【のような二人の女の子】たちであるナンシー・ニッキーズとフォレッタ・ラジャンベの話が来る！その次にあの3人の男たちの話だ。高利貸しについてのことと高利貸しに対しHCEが署名したこと全部についてもね。こう言うのも残念だけれども、ALPはHCEのクシャクシャのベッドを広げたあと、口やかましい詮索好きの人たちが喜びそうな泣き言を二日間並べたて、売春婦を【娘に】もったインカ帝国の母親のように、[423] HCEを馬鹿にし滑稽化していた息子【シェム】にヘブライ語でわめき散らしていた。つまり名前も知らない男が自分の太ももをつねったとか、髪の毛マークのカツラをつけたはげ頭の男についてとか、この男がビールに酔ってもの見事に卵を落として、そのために皇族みたいな離婚をしてしまったとかいう話をね。チェッ、チェッ、全部ブルジョワ的背景をもつ奴らの話なのだ。そしてこいつ【シェム】はね、トリックスターのようにしつこいギャンブル野郎で、あのスイフトのように汗っかきで、奴が編み出した訳の分からぬ言

葉をしゃっくりしながら夢中で大型ペンで書きつつも、チャイルド・ハロルドのようなしかめ面をして、6番目の指【煙草？】をその猫のような目と人指指の間において、アームチェアで恍惚の表情を浮かべ寝込んでしまう！うずくまっている！奴にはこの言葉をもくれてやった、剽窃野郎という言葉だ。それにあの手紙は全くけなされても仕方がないものだった。きっとケートもネルも【売春婦たち】もう一人もいないので、奴は酒を飲んでいのではないか。奴を見かけたらそうなっているだろうよ。判事様のお蔭で、あの事全部について、【奴を裁く】特別大法官の免許状【をもった者】の手助けをする機会が僕に与えられたのだ。家庭を滅茶苦茶にするあの怪しからぬシェム・スクリヴェニチが、いつも俺の文章を切り取って奴の文章にしてしまうことを考えるたびに、いやはや、俺の顎は痛くなる！奴の考え方を俺が批判することで、奴はゲスな言葉で戦慄の自伝を書き始めるだろう。あの詩人は！あの大スターは！待て、泥棒！ほら、彼奴は変わり者なのだ。あの特別な病人は。老婆の臭いをまき散らして。変節ぶりは当たり前の話。僕の親愛なるシェムは、死ぬ直前の装いをしたり、世間の皆におじぎをしたりした3歳のときには病気の白鳥のように白髪まじりで、7歳になって悔い改めたときには老眼鏡をかけていた。首の上で冬を過ごすニレの森【のような頭髪】は岩石の形をしており、つまずいたときに舞い上がり、ついにはあの醜い櫛が詰め物のような頭からその頭髪をとってしまう。理性を失う年齢の頃、驚いたことに初めて僕より先に奴が病気になる時、奴はワーッと笑い転げて倒れてしまった。いいかね、あいつは変人で、まさにあの魂に至るまで古ぼけているのだ。奴の義足やタン皮のような顔色を気にしないでくれ。あんだから奴には友達ができなかったし、「絶望的屍法」の下に、結婚というレース場からも追出されてしまった。別段驚きもしなかったが、パークリーがロシアの将軍を撃つたのと同じ理由で、聖人も奴を閉め出した。お前はそんなことはないと言うだろう、お前は今までそうやってきたし一番にそう言うさ、お前はそうのように言う奴だ、そう言われる奴だ、あいつらはそう言われるであろう。それから奴はミス・ガータードによって、授業をさぼったということでシングモートスクールを追い出された。そのあと丹毒にかかって、イエズス会に入った。フランシスコ修道会のコールズ修道士やフラン・クゼシュ修道士、[424] プスス修道士、スラヴォズ修道士らとともに。あるとき、死にそこなったときに、この変人は二カ国語がつまった頭を意図的に働かせながら、アイリッシュ・タイムズを読み、ドミニコ派のスカイテリアとしての知識人のところに行き、彼らに加わりたがった。聖なる父の目をくらまそうという訳だ！昔奴は人から避けられていたし、今でも奴を避けるべきだ。僕は一回だけふとその気になって、たたきつぶしてやる、と金切り声を出したことがあった。そのあと奴は一人でチェチャーリア通りに行き、医者に見てもらった。セバストポリーの戦いだよ！

インクポット野郎とは！あいつは血の中にインクが混ざっている。シェム！他の誰よりも奴を僕は軽蔑している。だまされたブルーストだ！恥辱を受けながら！シベリアがお前のような貴族主義者に仕えるだろうよ！ロシアの秘密警察が牢獄やら檻への片道切符を用意してくれる！異教徒め、俺から離れて海をわたってしまえ。ゴミはトリニティー・カレッジに残しておけよ。チャンスはなくなったのだ！ふん、ざまを見やがれ！宿命的にお前は…XXXXなのだ。

—しかし何のためなんですか、人より3倍も真実味のある語り手の高貴なショーンさん、と我々はおずおずと高貴なる者に今なお尋ね続けた。どうか仰って下さいよ。ねえ、ショーンさん、どうでしょう？なぜシェムを嫌うんですか。

—もしなぜとお尋ねになるなら、それは奴の根本的な言葉の使い方のためだ。ショーンは信心深いカトリック教徒のように、敬虔に十字を切りながら答えた。奴は忘れた振りをするんだよ。口蹄疫患者め！（【理由として】他にいったい何がある？）奴は言葉をちよるまかしては、引っつけてごく最近の作品に仕立ててしまった。幾多の神の怒りに触れるような行いだよ！お前にはトール【北欧神話の雷、戦争、農業の神】のハンマーが食らわされるぞ！

—再び100回も文字化された名前ですね、完璧な言葉遣いによる決定的な語。その近くまで必ずやあなたは行き着くことができるだろうと私たちは思うんですが、強靱なる息子のショーンさん、と我々は予測した。どのようにしたらそのようなことができるのですか。

—穏当に仕上げればいいのさ！穏当さだよ！最後から2番目の音節にアクセントを置く俗っぽい言い方でショーンは答えた。そして木の幹のようなサトウキビから口を移し、ジョン・ジェームソンのウィスキーを一杯痛飲したが、それは豚に真珠【とすべき価値あるものを無価値にする飲み方】だった。穏当さをもってはいるが類似品だね！薄暗い夕方の汐が引き、みんなが寝静まるまでフォー・ウェイヴ【アイルランドの海岸の4つの地点】に向かって語りかけているようなものだ。がっかりするね！絶望的だ！僕が以前言ったように、七感【五感に知覚と言語感覚を足したもの】をもっている者なら決してこのようなことはできないだろう。ただ君たちは僕の主意を見落としてしまった。あれは焼夷弾なんだからね。あの中のあるゆるふざけた文字が写しものであって、そのシラブルの多くや単語全体を、僕が書いた「天の王国」の中にお見せできるのさ。奴の饒舌ぶりといったら！あの単調さは三ツ星級だよ！まさにそうだ！盗んだ話の極致さ！おまけに、完全に品のない計画的な盗作なんだ！そうなんだよ。僕の手紙を奴は書いたんだからね。[425] 君たちみたいにさ。そして奴の高慢な鼻をへし折ってやったんだ。君たちのようにね。奴は確かに僕の話の盗んだんだ。君たちのごとくに。双子なのはどういう訳なのかね。

—でもあなたにこびへつらって申し上げる訳ではあり

ませんが、思うにある意味で、あなたは相も変わらずすばらしく頭がよく、知識を十分にもった方でいらっしゃるのだから、株式会社シェイマス・シェイマナス出版社はあなたの一番悪辣なところを使いたがっていますよ、才能あるショーンさん、と我々は今なお想像を述べた。どうか時間を取って、そうして下さいよう【シェムの悪口を本にすること】骨を折って頂けないでしょうか。さあ、そうして下さい！

—疑いようもないことだけれども、これは勝利だ、と彼に血を分け与えた者がもっているつぶやき声を機能させ始めながら、ショーンは答えた。また悪評判をまき散らすことは罪ではないので、そのようにできなかつただけでも恥ずべきことだろう。みんな、だから安心していてくれたまえ。醜聞の力を借りて、責任をもってそうするよ（きっとそうする！）。僕の都合のいいときにね（僕が戦利品を獲得することに5ペンス賭けてみてくれ！）。最大の意気込みをもってそうするつもりだ。というのも、ほら、たいていの人たちよりは僕の方が双子について語れるし、眼をつむっていてもそうした事務作業を僕が極めて簡単にやるとのけるということは、言うならば公然の秘密だからね。いや、鷹揚な気持ちでいてくれ。ヒヨコマメのことを喋るのと同じくらい簡単にこのことについて、当てこすりを含ませながら、メアリーを二人買う値段で書くつもりだよ。僕の三部からなる台本は、この正統派の人生論は、脚光を浴びれば（この書については、僕は信じられないくらいの自信をもっている）、あの偽の反抗的な恥知らずである僕の双子の兄、同性愛の盗人シェムが、音をたてながら黒インクで詳しく書き留め印刷したものよりもはるかに優れたものになる。非道と悲劇に満ちた葉書。喜劇風の学術的な書簡。僕は色々な人間を心の眼で捕らえている。いいかね、近いうちにその気になったら、自分の言葉によって今晚にも自滅を招くことになるかもしれないが、まさに価値ある作品にふさわしく、敢えて筆を執って、考えたことを出版しようという思いになりかけている。僕の言葉に気をつけておいてくれ給え。僕の署名に注意を払ってくれ給え。心広き同士諸君、この作品は君たちのパトリックのように先見のある人の目を開かせるだろう。ただね、教皇派としては、未熟者としては、新改宗者としては、二枚目のモデルとしては、その他の111の存在としては、僕は大変な苦勞をしてそんなことをするつもりは全くないのだよ。なぜそうなのかって？僕は完全に狡猾な男で、そのような類いの悪意のために品格を落とすことを潔しとしないのだよ。雲の上や天に存在する、僕が神聖と思うあらゆるものに賭けて、パイプを吹かしたまま宣誓し、[426] またショーンの威厳を見せつつ（これは大層な名前だ！）次のように言明する。僕の母親の魂に火をつけようとする放火犯は誰であれ、どんなに頭がよくともそうした悪者は火刑にしてやると。僕の心をちゃんと揺さぶってくれ、でもね、畜生、僕はそうしてやる！

—そして彼の3本足のストールがたてるそのカタカタと

いう音が、悲しみを引き起こし、あらゆる笑みを奪ってしまった状況の下、大柄の、気難しい、激しい感情をもつ、しわがれ声の、強靱な、力のあるこの闘士は、このような人物ではあったものの、母親を思い、悲しみに胸が一杯になり、母親の髪の中で絡ませた白髪への愛情で自分を抑えられなくなり、母親への思慕で泣き崩れんばかりであった。というのも、彼は確かに一介の軟弱で、単純で、気の弱い、世間の人間だったからであり、その胸にモンゴメリーの小説に出てくる人物のような【繊細な】心もち、重荷となった感情もち、生まれたばかりの子牛のように無邪気で利己的な気持ちになかったからであった。今なお、無私の精神に満ちた彼は、涙を拭き、笑ってそのずんぐりとした体から涙を拭き去り、詫びるように涙を抑えると、辺りを見回しながら、眼に微笑みを浮かべることで、涙を癒したのであった。彼の腹にはこれ以上の鳩肉を入れることはできなかった。すべてはなくなっていた。幸福な罪。留意してもらいたいのだが、彼の顎は眠くてこれ以上話すことができないくらいだったものの、彼は今最高に真剣であった。しかし更に、少しの間彼は体の動きを止め、きつく手かせをかけられた手首から眼を上げ、幻想的な大海の向こうにある、ジュピターの気体状のトーテムである、すみれ色に満ちた天界に生えている雑草【宇宙の中の星々】をじっと見上げていた。総じてこれらの雑草は現在において物語っているのではなく、過去において物語っていたのであり、未来において物語っていくであろうからだ。そして彼は、螺旋状に紡ぎだされた夢をネックレス代わりに首に巻きつけ、親指を拳の中に入れながら、少し前にそうしたがっていたことだが、大熊座（天の川を滑り行く星々と、古の方を向いている福者の住まい【である天国】との間にある）を重要な基点としてずっとさかのぼって過去を調べ、太陽暦、教会暦年、暦年、恒星年の中に、いかなる時代が見いだされるのかを探ろうとした。そして聖なる薬缶【の中に入っている酒】によって、丸々とした手足の調和的バランスを失うと、稲妻が光るように瞬間的に、彼の樽のような身体の非常な重みにより（彼がこうなるのを防いでいたものすべては、たとえそれが重要なものでないにしても、これからも防ぐのであろうか）身を傾け（アア、祖先の罪なのだ！）、これまで彼が演じることのできた最も巧みな最終的演技として、一挙に倒れ、瞬く間もないくらいの間に、非常に奇妙な、靴を履いてすべるような動きで、しっかりと、痛々しく、滑らかに、[427] だるそうに、このリンクマンはのんびりと、このランプマンはぶらぶらと、後ろの方に水に浮きながら【樽に入って】転がり、ラティガンの角を通して、ずっと声の届かないところへと行き、まずまずのくつろいだ様相でキラニーの湖や滝を、コルク製の樽板と茶の葉とともに、これまで以上にひざに泡を浴びながら過ぎ、この町の触れ込み役は時代遅れにもマック・オリフ【4博士の一人であるマタイ・グレゴリーのこと】の十字架の館の方角に向かって「ドアよ、静かに開け」と叫び、谷を

下り、その後実際に立ち上がり、次に町々を（すべて！）下ると、ポンとはじけるように何の痕跡も残さず姿を消し、いなくなってしまった。アーメン！

去ってしまった！道中達者で！

そして星はきらめいていた。そして夜の大地は馥郁たる香りを漂わせていた。彼の風笛曲【スコットランド高地人の勇壮な曲】は暗闇の中をゆっくりと広がっていた。蒸気が大気の流れに乗って漂っていた。芳香を漂わす彼は我々のものだった。そして一生涯我々は彼のものだった。アア、けだるい美しい夢よ！タバコの煙のよう！

それは魅力的であった！しかし魅力的なことだった！

そしてランプは燃えて輝くことができなくなったので消えてしまった。そう、ランプは輝いたままできなくなったので消えてしまった。

さて、（あなたのような人がいなくなって、我々は何時間もどのようにして過ごしたらよいのか！）すべてが味気なく、真実味を欠いたものになっている。朝の光が我々の最も激しい苦痛を和らげる前に、私の同胞であり、有能なショーであるあなたが、身体的な結びつきや見知った顔を離れ、象の産地のアフリカの奥地や高層ビルが誇らし気に伸びているアメリカの西部へと、海原を越え、衣服をはためかせながら去っていくのは惜しむべきことだし。それ以上に哀れむべきことだ。しかし、謙遜を美徳にもつ身分の低い人たちには分かることだが、あなたが頻繁にそして継続的に、数多くのあらゆる種類の善行を幾多の人たちにさえ行っているが故に、私のショーよ、古の国に住む我々はあなたと別れがたいのだ。というのも、聖なる子よ、あなたは生きた聖人であったし、あまりにも偉大な我々の擁護者であったし、神の恩恵を受けた者であったし、哀れみ深い人であったし、弱い者の慰め手であったからだ。その容貌が似ていないことに、息子を愛するフィンはつらい思いをしている。試合の勝者よ、学問に秀でたる者よ、書物から予言する者よ、思慮分別のある時代の選ばれたる者よ！我々の空虚な沈黙の代弁者よ！いつでも機会を見て、この穴居者である無学な我々のことを思い出し給え。何らかの方法で、寝床のある故郷の我々の元へどうか戻ってくれ給え。どこにいたのであれ、我々はあなたの笑顔を見られないために寂しい思いをしている。[428] ヤシやワインやパンや果実や菓子や肉やミルクに浸したパンがここにはある！ミルクもあるのだ！いかならうとも！健忘症にかかっても、ここにいる我々民衆はあなたのことを忘れてしまうことは決してないだろう。年長者【4博士？】たちは日々の経過を確認し記しながら、細雨のような細い字で四つのむき出しの筵にチョークで次のことを書きつけるであろう。あなたが心の中でどのように思っているのか、一体全体どうしてそうした【ここを去るという】思いが始まったのか、過ちを犯していることを十分に理解して、どのようにあなたは良心の痛みを感じているのか、といったことを。アイルランドがあなたを呼んでいる。マリー・ルイー

ズ【のような娘】も別れを告げている。そしてグラス工場の娘も意味ありげにさようならを言っている。強靱な性格の持ち主よ、考え方を交え給え、そして若者よ、もう一度だけこの世で我々の元に留まり給え！そして大きな繁栄があなたを故郷に留まらせますように！そしてあなたの希望が霧の露からダイヤモンドの指輪になりますように！あなたに忠実な樽の栓が、再度樽の穴をしっかりと閉じてくれますように。大麦を揺らすほどに吹く追い風が、海を行く者としてのあなたの脛に幸運をもたらしますように。まさしくイギリス郵便事業の笛をどこちなく吹いているあなたが、我々の元を去りたくなかったことは、我々は十分知っている。しかし、アア、あなたがブラマンジェを食べた夜のあと自然に来る朝が、国民に行き渡る金色の日の出の朝と交わるときに、また、豪華船ジョン・ジョイス号が浸水しかけているアイルランドの王【パーネルのこと】から風を受けるように、老いてまともに歩けないジョージ 4 世にダン・レアリーが背中を向けるときに、あなたは聖母マリアの恩恵によって、夢の書の一ページを書いている我々の眠りの鼓動に合わせて、荒れた海を越え、背中に郵便袋を背負いつつも、聖者となって、アア、いつの日かきっとあなた自身の終末論を完成させるであろう！あなたのような善良な人間にふさわしく（そうではないだろうか）、雪を掘り、ポケットの内側を裏返しにし、新たな神の許しを求め

ながら、熊手のような雨の中を進みつつ。そうした日からこのアイルランドに帰る日まで、ともかくも、休息中の樽の住民よ、低木の茂みを踏み行くあなたの足下にすぐに草が生えますように、そしてキンボウゲの上をあなたの靴が軽やかに歩みますように。

(注)

『フィネガンズ・ウェイク』の原典は、James Joyce, *Finnegans Wake* (N.Y. Viking Press, 1947) を使用した。本文中の [] 内の数字は、*Finnegans Wake* の原典のページを表す。【 】内の日本語は、該当箇所の内容を筆者なりに解説したものである。() 内の日本語は、原典の () 内を訳したものである。参考文献としては以下の書を使用した。

1. Campbell, Joseph and Henry Morton Robinson. *A Skeleton Key to Finnegans Wake*. 1944; rpt. New York.: Viking Press
2. Rose, Danis and John O'Hanlon, *Understanding Finnegans Wake; A Guide to the Narrative of James Joyce's Masterpiece*. New York: Garland Publishing, 1982
3. McHugh, Roland. *Annotations to Finnegans Wake*. Revised edn. Baltimore and London: John Hopkins University Press, 1991.
4. Glasheen, Adaline. *A Third Census of Finnegans Wake*. Evanston: Northwestern University Press, 1963.
5. Mink Louis O. *A Finnegans Wake Gazetteer*. Bloomington and London: Indiana University Press, 1978.
6. 柳瀬尚紀訳、『フィネガンズ・ウェイク』I、II、III、IV、河出書房新社、1991年
7. 宮田恭子訳、『抄訳、フィネガンズ・ウェイク』集英社、2004年

『フィネガンズ・ウェイク』第3部第1章の概要

大島 由紀夫

(東京海洋大学海洋工学部海事システム工学科)

要旨： ジェイムズ・ジョイス著『フィネガンズ・ウェイク』の第3部第1章(403ページ1行目から428ページの27行目まで)を訳出した。逐語的に訳したところもあるが、内容をくみとりながらその主意を表したところもあり、「概要」といった題名にした。この訳出した箇所では、ショーンと民衆との対話が描かれてある。

キーワード： フィネガンズ・ウェイク、第3部第1章、概要